

特集

冬季企画 シンポジウム

映画・女性・権力—ジェンダーと視覚性—

冬季企画 シンポジウム

## 映画・女性・権力

—ジェンダーと視覚性—

主 催：立命館大学国際言語文化研究所  
共 催：ジェンダー・スタディーズ研究会／日本文化と視覚性研究会  
日 時：2006年2月21日（火）15：30～19：30  
会 場：創思館 カンファレンスルーム  
  
司 会：中川 成美（立命館大学）

### 講 演

「マゾヒスト・エイジェンシーの（不）可能性」

講 師：竹村 和子（お茶の水女子大学）

「境界，映画的身体，女性」

講 師：斉藤 綾子（明治学院大学）

「アイデンティティ（脱）構築の迷路—寺山修司の『田園に死す』を中心に」

講 師：池内 靖子（立命館大学）

### コメントおよび質疑応答

コメンテーター：李 静和（成蹊大学）

田崎 英明（立教大学）

※上記はシンポジウム当日のプログラムであり，以下に収録された報告のタイトルとは異なる場合があります。また，コメントの順番も異なります。

## はじめに

池内靖子

立命館大学国際言語文化研究所では、ここ数年、総合テーマ「国民国家と多文化社会」のもとに連続講座を設定し、現代思想、歴史、文化、言語とかかわって生起するさまざまな問いを掘り下げてきた。とりわけ、研究所の主要プロジェクトの一つであるジェンダー・スタディーズ研究会では、労働に関する制度・構造分析と文化表象分析という二本立ての研究活動を組織し、その特徴を生かしたユニークな成果を発信してきた。今回、「ジェンダーと視覚性」というテーマで設定したシンポジウムは、ジェンダー・スタディーズ研究会におけるこれまでの文化表象分析の研究活動を継続するものであり、また日本文化と視覚性研究会においては今後の重要な問題項として発展させていきたいと考えているものである。

「ジェンダーと視覚性」というテーマで議論したいことは、視覚性の問題をジェンダーの視角からどう問い直すことができるかということである。とりわけ、ジェンダーとは、性差2分法によって非対称的な社会関係を構成していくカテゴリーであり、権力関係を表す第一義的な方法であるという、フェミニズム理論における90年代以降のジェンダー概念の転換をふまえた場合、文化表象の分析はどのような可能性をもちうるのだろうか。そしてまた、ジェンダーの自然化され、本質化された性差、そのカテゴリーの歴史性、偶発性を明らかにすることは、同様に、他の自然化され、本質化された諸関係の構成要素、階級、人種、民族、セクシュアリティを問い直すこととどのように交差しているのか、その問題も、これまでの本プロジェクトにおける文化表象研究が明らかにしてきたように、重要な問いである。視覚的なものの表象は、さまざまな社会関係の可視化、不可視化といった権力の問題でもあり、重層的にからみあう差異化をとおして表われる効果を読み解く必要がある。視覚性の問題は、絵画や映画、写真において考察されることが多いが、今回は、映像・写真を中心に議論したいと考えている。